

雜 錄

ク ロ ツ エ の 實 踐 哲 學

尾 生 光 三 郎

一

無上命法の峻嚴侵し難き道德法を樹て、以後倫理學を研究する者は到底之の範圍外に出づるを得ずと迄に後の者をして讚嘆せしめたるカントが、第二批辯證法に於て制約なき至高善を要求しこれをもつて至高の徳が至高の幸福と各致したる状態なりとなし、然も此の福德一致は現在の世界に於ては感性妨害の故をもつて望むべからずこれを來世に求めざるべからずとして靈魂の不滅並に神の存在の二公準を置いてまでも福德の一致を願つたことや、又カントに依つて再び立つことを

得ざるに非ずやと疑はるゝ程根柢的に批評し盡されたる快樂説、幸福説が彼の後にも猶存續してゐること、即ち、幸福を求むることを目的としてゐる功利主義が、一切の幸福的要素を除いて純粹の本務の念のみによつて吾人の行爲を決定せんとするカントの所謂嚴肅主義から艾除を免れたばかりでなく、實用主義を初め人本主義等の功利主義的色彩の濃厚なる學説が近時益々高唱せらるゝに到つたこと等を想へば幸福的要素又は、人生に有利であるとか不利であるといふことが如何に人生に深き根柢を有してゐるかが窺はれるのである。

功利主義と嚴肅主義との對立たるや必ずしも近世に初まりたるに非ず、勿論その説く處精粗の別あり又名稱の相違は有れど何時の時代にも存したものであつて、従つて兩者の調和を劃つた考も多々出たわけであるが、その多くは假面を冠つた功利主義であり、又或少數の者は軟化した嚴肅主義であつて共に深く兩者に徹底して眞の調和を見出したものでない、二者を如何に展開調和して行けるだらうかといふことは興味のある問題であると思ふ。今此方面の一つの試としてベネデット・クロツキ (Benedetto Croce 1866) の實踐哲學を以下に紹介して見やふ。ヘーゲルの影響を受けた人で「精神哲學」と總稱してゐる氏の哲學體系を述べた三つの主なる著書がある、一、美學、二、論理學、三、實踐哲學これである。

クロツキの哲學は内在的觀念論とも言ふべきものであつて、精神をもつて唯一の實在性を備ふ

るものと認めてゐる、然して此の實在は絶對的な不變の理性ではなく、時間の經過に連れて自らの可能性を發展せしめて行く普汎的生命である。この觀念論は進化の言葉をもつて表はすことが出来る。何故ならば實在は無限の可能性が無限の現實へ絶えず轉化せらるゝ發展の過程であり、精神活動に於ける統一は雜多を征服することによりて得られるのであるが、この統一は更により高等なるより完全なる統一を得る爲めに分解するものであつて進化して留まる處を知らないからである。この普汎的進化は人の實踐的生活の基礎、根柢である執意の活動に依つて遺憾なく發揮せれるのである、即ち人は實踐的活動に依つて世界を變化改造するものである、實踐的活動の外に、それと相列んで理論的活動が有つて、この働きを借りて人は世界を認識し得るのである。

精神には斯くの如く理論的並に實踐的の二活動

が有つて、此以外に活動なるものなし。若し有りとするならばそれは以外の二活動の錯轉せるを見誤つたものである。二つの活動には各々二つの形式がある、理論的活動には直覺的個人的形式と知的形式即普汎的知識の形式がある。前者を取り扱ふ學問が美學であつて後者を研究するのが論理學である。(この二者に對してそれ／＼前掲の美學論理學の二著書が順次に出版せられてゐる)實踐的活動には、經濟學的若しくは功利主義的形式と倫理的又は道德的形式とがあつて、前者を對象とする學問が經濟學で、後者を論題とするものが倫理學である。この二つの學問を併せて「實踐哲學」と呼んでゐる。斯くの如く精神が理論的活動と實踐的活動とに別れるならば、思考と作爲、智と意の二元を認めてゐるかと言ふに左様でもない、智は作爲の智であり、作爲は又智の作爲であつて、智と意とは離反し難いものである。

二

「實踐哲學」は精神に實踐的活動が有るといふことの論に初まつてゐる。吾人の周圍の生活を一瞥すれば特別に證明するまでもなく、實踐的活動の一團が理論的活動と並び存在することを想定せしむるに充分である。吾人は人生中に相互に異なる思考の人と活動の人、一方に詩人哲學者、他方實業家、政治家等の言はゞ物質的に相異なる人を見るのである。彼等の爲す處は彼等の異なるが如く異なつてゐる。吾人は一面に舊き確信を覆へすべき學問上の發見に眼を見張れば突如として全然異なる種類の光景に驚かされるのである。或者は武器を執つて相争ひ又或者は社會の組織の爲めに反目してゐる。興味と憤怒、希望と畏怖徳と不徳を恰も畫家が繪具を使ふが如くに曝け出して實踐的性質の大幅を描出してゐるのである。これ恰も自然が種の保存の爲めに人を別つて

男女と爲したるが如く活動の孰れかの形式に專屬せしむる様に人を造り出したかの觀がある。乍然この實踐的形式にのみ活動し、理論的形式から離れたる生活の様式は存在しないのである。此の存在、この差別は幼稚なる、皮相的なる哲學的反省によるものであつて、更に深く洞察すればこの別

ある、如何となれば意志なしには何事も爲されなからである。アウステルリッツの戦も思慮の結果であつて、デンテの「神曲」も亦意志の作業ではないか。要するに理論的なるものも實踐的なるものも個々別々には存在しないものであつて、共に一つの事實である。

は存在しないのである。實踐的のみなる人も存しなければ又理論的のみなる人も存しない。理論的の人はやがて實踐的人である。彼は生息し、執意し、又總ての他人と同じく作爲するものである。所謂實踐的の人もやがて理論的人である。彼は考慮し、確信し、思惟し、讀書し、音樂其他の藝術を嗜好するものである。全然實踐的精神のみによりて爲されたりと思はるゝ事業も精細に點檢すれば、極めて複雑にして理論的要素に富むものなることが見出され、他方に純粹に藝術的又は哲學的精神の發露と想はるゝものも意志の所産で

前記の如く實在に關し二者をもつて全然別物の如く解する普通の反省の過程が哲學上には何等の權威をも有せざることが明かであると共に、心理學的方法も哲學上の問題に應用しては無力なることが察せられるのである。何故ならば心理學的哲學は如何に浩瀚なる論文をもつてしても、又如何に壯重なる講義によつてしても普通の反省以上に出来ることは出来ない。否普通の反省に過ぎないものである。人の活動の限り無い表現の影像を捕へて、例令、意志や活動を、思考の働きや空想力と相並べて分類したとするにしても心理的哲學に於

ては直ちに此分類をもつて實在なりと見做すのである。乍然分類は何處迄も分類であつて哲學的差別を意味しないのである。若し此意味に彼等を解するならば遂には眞の實在は存在せずと認めなければならぬ事に立ち到り、精神の作用の非實在性を叫ぶか、或は、その作用は實在には關係を保たずして單に心的考案として存することを許さねばならぬ。吾人は斯くの如き心理學的哲學の肯定乃至は否定に耳を貸してはならぬ。例令實踐的活動の存在を肯定したにしても吾人はそれが哲學的方法に依つて立證せられるまでは信じてはならない、又否定せられた場合にも同様である。哲學的方法は經驗的事實及其の分類から完全に抽象せられ、唯心の眼を注がが爲には意識の奥底に隱退しなければならぬ。斯くの如き方法に據りてこそ始めて個々の意識は普汎的實在の類型とも尺度ともせられるのである。哲學的探索の對象は個人として個人には非ず、個人の中に入つては個人の意識の基底となる普汎的意識である、個人の内心を顧みる哲學は其處に自己の經驗的自我を求めのではない。プラトンは、アリストとペリクテオーネとの兒童を求めてゐるのではない、スピノザは貧困にして病身なる猶太人を求めてゐるものでない。彼等はプラト、スピノザに非ずして、人であり、精神であり、普汎的存在なるプラト、スピノザを求めてゐるのである。と言つて氏は個々の精神個々の意識を言はずして普汎的精神は個々の意識を言ひ、實在を認識せんが爲めには心理學的方法を捨て、哲學的反省、内心の深き洞察に據らざるべからずとしてゐる。

斯くの如き哲學的反省の光を造つて進まんに、精神の實踐的活動なる形式が果して存在するものか如何か。(理論的活動形式の存在は前二著に論ずる處である)此の存在を否定する説は次の二説

に歸するのである、即ち、第一「實踐的形式は精神的活動ならず」。第二「それは精神的活動なるにしても然かも既に認められたる精神の理論的形式より如何にしても區別するを得ず」との二説外に出づるを得ない。

第一説を執る者は曰く、「吾人は執意の時及其實際上の發展中には意志を意識するを得ない、この意識は人が意志して後、即ち執意の作用が發展せられた後に初めて得られるのである。夫故意志即ち、實踐的活動は精神の一活動では無い、無意識であるから其は自然であつて精神ではない、これに隨ひ來る理論的活動のみが精神的である」と。吾人若しこの議論を容れるならば如何なる精神の活動も精神に屬せざるに到らん。彼等は總てのものは無意識なるべければ總て自然であるとの結果に到達しなければならぬ。實に藝術家の活動は彼が眞に藝術家である時、即ち、藝術的創作と呼ば

る、瞬間に在つては無意識である、後に到つて始めて批評家の心、又は自己自らの批評家となつた藝術家の心に意識せられるのである。又實際に藝術家に就いて無意識であると屢々言はれてゐる。それは自然力である、狂奔である、神の靈感であると言はれる、此の熱の冷め始めるに及んで意識せられるのである。哲學者の場合も亦同様である。彼は彼の思想を反省することなく、唯、思索するのみである。或は或者が恰も微細菌が吾人の身體中に營養物を攝り、蕃殖し、死滅すると等しく、彼の中に考を進めてゐるのである。彼は其瞬間には無意識である、自らの批評家となるに及んで又他の批評家を俟つて初めて意識せられるのである。然らば最後に批評家又は歴史家は少くとも意識して批評、判断するのであるかと言ふに、此又前者の場合と同様である。故に執意若しくは行爲に際し無意識なるの理由をもつて精神活動に非ず

と拒斥するならば一つとして精神的活動に屬すべきものなきに到る。乍然この否定たるや意識に就いての謬見に依るものである、自發的なること

と、反省的意識とを混同せるに起因してゐる。斯かる意味に於いてならば、吾人は意志を意識するを得ず。詩句をもそれを批評する時を除いては意識することはないのであらう。乍然詩を讀み、或は作る人の作爲其物の中に意識がある。彼はそれの美に就いて、又醜に就いて、又如何にあるべきであるか、あるべからざるかと言ふ事を「意識」してゐる。(此以外には發表の方法が存しない)此の意識は批評的ではない、さればとて夫が爲に眞實で無いのではない。斯くして執意及實踐的の行爲にも意識がある、但、反省的方法でその行爲を意識するのではないが斯く感じるのである。幸及不幸、安寧及不安、満足及悔恨、快樂及苦痛の選擇の瞬間に發展せらるゝのである。若しこれをしも無意識

なりと呼ぶ者あらば吾人は無意識は意識其物なりと言はざるべからず。茲に於いて實踐的活動は意識的にして精神の一形式なりと見るを得。

第二説の論者は前者の如く意志を精神の外に置く者には非ざれど、精神的活動の理論的形式と實踐的形式との別を認めず、意志をもつて思想なりとする者である。意志は叡智其物であり、意志すとは知ることであり、實踐的に良く行はれたる行爲が眞理であると主張するのである。之れに對して吾人は意志及實踐的活動が知識とは全く性質を異にせることを想ひ起さねばならぬ、智の光は冷かに意志は暑し。若し意志が働かなかつたならば、總ての説は如何に稱讚すべきものであつても、何處迄も議論に過ぎないのである。意志の訓育は理論や定義に據らず、意志その者の訓練によつて行はれるのである。推理や知識は終局的決定的要素を構成するものではない。

三

精神活動を智情意に別つ説、三能力説が一般に行はれてゐるのであり、今智と意の作用が精神活動の二形式として認められたのであるが、然らば感情の働きは精神哲學では如何かと云ふに、容れられない。一般に感情の作用と呼んでゐる者は理論的並に實踐的活動に還元し得るものであつて、何等特殊の形式でない。精神的事實又は發現にして、想像知識、及知覺、即ち理論的の行爲乃至は功利主義的又は道德的行爲に還元し得ないものはない。

精神の唯二つの活動形式相互間の關係に就いては「先づ第一に實踐的活動は理論的活動を豫想すとの措置を確説しなければならぬ、意は智なしには不可能である」と言つて居る。智の意に先行するを認めたりと雖、此れをもつて、意志を引き去つた理論的の人、理論的要素が考へ得と爲す者で

はない。これは眞實ならざる抽象であつて、眞の抽象、即ち、普汎的具象を取り扱ふ哲學上には全然許し難い。精神の此等の形式は差異は有れど別個のものではない。精神が若しその形式中の一つに現はれた時には、或はその中に顯現せられた時には、他の形式もその中に存してゐる、但、潜在してゐる、或は、共存してゐるのである。純粹に理論的たらんが爲にも或程度まで實踐的であることが必要である。純粹想像、純粹思索の勢力は執意の軀幹から湧出するのである。理論的活動が實踐的活動に依屬するものなることを主張する説、實用主義の主張は、吾人か認めたる精神能力のこの一致の證明又は認識的精神の健全を劃るには、執意力の缺くべからざるものなることを證明する爲にのみ價値あるものなり。されど思考作用を意志にて補助すること、思考作用を意志にて置換するのとは別事であることに注意せねばなら

ぬ。思考作用を意志にて置換せんと主張するは、頓て、補助を受ける者の否定と同義に了るのである。

實踐的活動は理論的活動を豫想してゐる。知識は執意及行爲の必要の先行者であると同時に、逆に理論的活動は實踐的活動を豫想してゐる。意志は知識の必然的の先行者であるとの反對の措定を置かなければならぬ。何故ならば實踐的活動は直ちに實在其物であつて、意志行爲以外には他の如何なる實在も考へ得られないからこの反對の措定を容るゝの餘義無きに到るのである。斯くて二活動は互に豫想し合つて居るので、互に循環關係を爲してゐるのである。

四

從來實踐的活動に就いては全般として見たる迄で、其活動の内にも異なる形式が存するか否かを論じたのでなく、唯、一般に其の存否、及其他

の精神活動の形式との關係を見たのであるが、理論的活動に直覺的、個人的並に智的の二形式がある様に、實踐的活動にも異なる二形式のあるを論じたのが本書の第二篇である。一は功利主義的又は經濟的他は道德的又は倫理學的の形式である。經濟的活動とは人が己の處する事情にのみ適應するが如くに執意し、行爲することであつて、倫理學的活動とは、此等の事情に適應するものであるが然かも且此等を超越せる或者に關係してゐることである。第一の者には個人的目的と呼ばれる者、第二には普汎目的が對應してゐる。一は夫れ自らに取り容れたる行爲に多少とも執着を有する判斷を興へ、他は個人を超越する普汎的目的に對して多少ともに關係を有する判斷を下すものである。

吾人若し道德的活動形式のみを執るならば、直ちに其とは相異なる他の者が引き去られたこと

に氣が付くのである。吾人の行爲は例令意義に於いては普汎的であるにしても、或具象的な個人的に決定せられたるものなるを免れないものである。實際に行はるゝものは普汎的な道德法ではなく、常に有限なる道德的執意である。ヘーゲルも言つた様に吾々は果實一般を攝るに非ずして、櫻桃、桃、梅又はこの櫻桃、この桃、この梅を喰べ

道德法と共に、或は別個に現はれるのである。道德的には許し難い行爲、又は個人が時としては吾人をして稱讚せしむることあるは實踐的活動の一面には斯くの如き形式が存するからである。藝術が悲劇に、詩に、道德的には大罪人で有る者の強き性格を讚美し然かも喜劇に小さい罪人を嘲笑するは又これ有るが爲である。

るものであり、又吾々はこの方法又は他の方法に據つて個人を幸福にせんとするものである。若し善き行爲も全然個人的快樂で無いならば如何にして吾人は其を實行し得ざるであらうか。斯く仔細に吟味することに依つて吾人の行爲は、例令、道德法が抑制せられた場合にも、常に合理的の法則に遵ふものである。個人を超越する有ゆる傾向が

次に道德的形式を排斥する者がある、即ち、これを經濟的形式に還元し様とする功利主義者である。乍然その説く處の幸福とは如何なる者か或はその量を如何にして計るかを質して行くならば功利主義は破滅に陥るものである。經濟的形式に直し得ざる格段なる道德形式の存することは疑も無きことである。

放擲せられた場合にも斯くして吾々はその故に無定見に陥るものでない。實踐的活動には全く個人的な、快樂的な、功利主義的な、經濟的な形式が

經濟的道德的形式の關係如何と言ふに、直覺的、個人的並に智的活動形式の場合に等しく道德的形式は經濟的形式を豫想してゐるのである。道德法

又は倫理學は實踐的活動の初階段なる經濟學に依屬してゐる。經濟的に意志すとは目的を意志するのであつて、道德的に意志すとは合理的目的を意志するものである。然し道德的に意志し、行爲する者は有益に、經濟的に意志し行爲せざるを得ない。執意的行爲は常に經濟的ではあるが眞の意志の自由は單に經濟状態に適合するとのみに存せずして、道德的事情に、個人以上の大なる人の精神に適合するものである。さりながら此をもつて直ちに經濟的活動が道德的活動に從屬するものである、下位にあるものと見ることは出来ない。彼等は二にして一、一にして二であつて、上下の區別は存しないのである。即ち、一に纏めらるべきもの、二面である。實踐的活動は理論的活動を豫想し、道德的活動は經濟的活動を豫想するものであるから道德法は人の統裁權を有し、如何に小なりと雖道德法が統裁しない、してはいけなげな人の行爲は存しないが然も道德法は精神の形式又は範疇を司配すべき絶對境は有しないのである。然も猶美的直覺が言はゞ現象世界は又は自然を知り、哲學的直覺が本體界又は精神を認むるが如く、實踐的活動の方面に在つては經濟的活動は現象界又は自然を、道德的活動は本體界又は精神を意志するものであると爲してゐる。

以上は「實踐哲學」の粗雜なる梗概を紹介したに過ぎないのであつて、猶此外にも様々の問題が取扱はれてゐる、例へば自由と善惡との關係だとか、過失に對する見解等があつて最後に法律論をもつて結んでゐる。

の、二面である。實踐的活動は理論的活動を豫想し、道德的活動は經濟的活動を豫想するものであるから道德法は人の統裁權を有し、如何に小なりと雖道德法が統裁しない、してはいけなげな人